

佛 教 研 究

第三卷 第二號

原典より見たる御本書の引用經典

泉 芳 環

『爰に愚禿釋の親鸞、慶ばしき哉や、西蕃月支の聖典、(中略) 遇ひ難くして今遇ふことを得たり聞き難くして已に聞くことを得たり、(中略) 斯を以て聞く所を慶び、得る所を嘆するなり』。

宗祖の所謂『西蕃月支の聖典』は云ふ迄もなく晋宋齊梁唐代の間に求法の高僧によりて將來せられたる所の手によりて翻譯せられたものである。譯場には通規あり、別則あり、潤文證義間然する所なく、五種不翻、八備十條、整然として一統亂れず、よく難解にして而も語脈を異にする胡梵の文書を翻譯し盡したことは確かに支那文化史上の驚異の一たるを失はないのである。

併しながら多少とも翻譯に經驗を有するもの自から首肯するでもあらう如くに、一國の語を他國の語に翻譯することは實に至難の業であつて、江南の橘、江北の枳、翻譯は實には不可能であると云ふのが寧ろ至當の言である。さるからに經典の如き教義と密接の關係を有して、其の文々句々

の解釋が精緻なる教義上の問題を惹起する傾向ある文書は翻譯の必要なると共に、本文原典との對照研究は實に闕くべからざるものである。支那文化があれだけの翻譯經典を生産しながら、毫も此の點を顧慮しなかつたことは實に亦驚くべき怪しむべき一事であつた。基督教の聖書にはともかくもヘブライ語やギリシア語の原典が保存されてゐる。回教もアラビアのコーランを所有する。獨り佛敎の聖典が此の點に於て相及ばざるの遠き、如何にも奇怪の現象と謂はざるを得ない。

過去數代の支那佛敎徒は、幾多求法の高僧が身命を塔して異域の寒暑と戦ひ、猛獸毒龍の難を物ともせず、辛酸具さに嘗めて、得來つた至貴至重の原典を抑も何處へやつてしまつたのだらう。彼等の大部分は翻譯を得たる後これを全く無用視して徒らに高閣に束ねて顧みなかつたのか、將た又餘りに過重視してこれを殿堂の中に奉祀し、禮拜供香して尊重し、遂に何人も研究室の卓上に之を繙き讀むことをなさざりしか、二者孰れか其の一に居らねばならぬ。孰れにしても支那佛敎徒の間に印度西域の言語の文典上の研究更に無く、完全なる辭典のありしを聞かず、原典研究は何人にも顧みられずして幾代を過ぐる間に數次の兵燹のために寺塔は焚かれる、文書は次から次へと失はれてしまふ。此の如くにして今日に至つたものである。若し夫れ多少ともこの方面の研究が續けられ原典が讀まれてゐたならば現今のやうな状態には決してなるものではない。國民性の然らしむる所もあらうが、佛敎原典が今や支那に痕跡をすら殘さないと云ふことは支那佛敎徒の迂濶と疎漏と懶

情どに歸する外は無い。支那方面から佛教を傳承した日本佛教徒も勢ひこの迂濶を引き繼ぎ來りて僅少な例外を除いては、明治何年といふ頃に至るまで聖典の原典に注意を拂ふものは殆んど無かつたのである。ただ寒心に堪へない事である。

或る者は云はん、聖典の原文がそんなに要るなら、印度へ行つて探したらよからう。印度は根本の本場ぢやからごれだけでも求め得られるだらうと。是れ一を知つて二を知らざるもの、支那の僧侶も多分こんな了見でゐたので千載にかけ換の無い文化資料を失つてしまつたのである。時代はごう變遷するか得て逆賭すべからず。如何にも本場であつた印度が幾代王朝の隆替によつて、或は反佛教主義の王のために、或は回教々徒の暴戾によつて現今では佛教の痕迹は印度本土の内に見るべからざる迄になつてしまつた。錫蘭緬甸には殿堂の壯觀見るべきあり、僧侶の數も少くはないが、經典は只阿含のみであつて方等經典は一として傳へられてゐない。佛陀伽耶に菩提樹を訪へど、聖像は毘紐の標相を加へられて黙して言はず。鹿苑の遺趾たゞ磚瓦の累々たるを見る。ペシヤワルの廢墟、多少の健院羅遺物を發掘せしも、往昔無着世親の跡杳として釋ぬべきなく、那爛陀、堂塔の殘存せるも、戒賢玄奘の攷學は居諸遙かに隔りて、菴羅林に注ぐ雨の音のみ古へを語り顔である。印度に於てかゝる有様であるから歐洲に知られた佛教も近代までは全く阿含佛教に局られてゐた然るに今から恰うど九十六年前、一八二六年ネパールの副駐在公使であつたホツヂソンが三百八十

一部の梵語聖典の存在を公表し、從來バール聖典のみを知つて其他を知らなかつた歐洲學界に一大反響を起したのである。此の中百七十四部の寄贈を受けた佛國のビュルヌーフは一代の傑作、佛敎史序論を著はしてこの資料を縦横に適用し、又法華經の佛譯を出す等、佛敎研究は全く一新生面を拓くに至つた。其後一八七三年から一八七六年に亘り、チバール公使館付軍醫正、ライトの苦心蒐集の結果、三百二十五部の佛敎梵語聖典がケムブリッヂに運ばれた。

此の間、ビュルヌーフの門下の傑俊マックスミューラーは一方梵語佛敎經典の翻譯出版に力を盡し、南條笠原の二氏與つて大に功績を擧げたが、又一方に支那日本の方面に梵語經典の搜查を怠らなかつた。其の結果、阿彌陀經、金剛經、般若心經等の發見があつた。然し此の方面は豫期した程の獲物もなく、現今に至るまでまづ絶望とせられて居る。

然し其後一八九四年にベンドールは更に五百部程のものをチバールに得てケムブリッヂに齎した。日本に於ても明治四十年頃から河口氏、高楠氏の蒐集にかゝる五百餘部の梵語經典、柳亮三郎氏の百餘部、これらは東西兩京の大學に保管せられて研究者を俟つて居る。又近年于闐、龜茲、等の西域地方から種々の文書が發掘され、露のペトロフスキー、英のパウワー、スタイン、佛のベリオ、レコック、獨のグリウンウエーデル各々それ／＼に蒐集品を報告して居るが、其中に梵語聖典の極めて古代に屬するものが少くない。追々これらが學界に反響を起すことであらう。

かくの如く印度に於て其傳を失ひ、支那に於て已に繹ぬべからざるものとなつた原典が少なからずチパール等から發見されたのはまだ百年に満たぬ程の近代のことである。この短い間にも世界の學者はあらゆる困難と戦ひ、苦心勉強してこの中少からぬ梵語經典を翻譯もし出版もした。ともかく一度出版しさへすれば大概何とかして後昆に傳へ得られるのである。支那佛教徒のやうな迂愚は繰返さなくて済む。前にも叙べた如く支那に於て湮滅した所以のもの、一はこれを片付けてしまつて日々親炙し得るが如き方法を講じなかつたからである。仍て種々な偽經も續出する。偽經であつてもこれを對照すべき原典が何の道無いのだから玉石を剖つべき標準も無いのである。序でなから原典さへ保存してあつたら起信論などが印度選述か支那選述かの議論の餘地は更に無い筈だ。又偽作だと云ふことにしてからがあまり問題にならずに判明するわけだ。

支那譯經典は六千餘卷の多數である。併しながら重譯を整理し、偽經を除外し、重要なものを選びすぎつたら案外單純なものにならうと思ふ。現今までにチパールから發見された六百餘部の原典の中には、多少重複もあり、整理も要るが、現在の支那譯が經典の整理されたならば大部分はこれで以て補ひ得べく、百年足らずの間に先づこれだけの業績が擧つたことを思へば、大に意を強くするものがある。パーリ經典は數に於て多い、梵語經典は至つて少ないと誰も彼も思つてゐた時代もあつたが、今となつてはこんな誤つた考は止めねばならぬ。こんな風の云ひ方は宜しくない。予は

現在の支那譯のどれとどれに原典が存在するかの表を作つて發表しようと思つてゐるが、結果は梵語經典の發見せられたものゝ多いことに於て思半に過ぐるものであらうと信する。

吾人はそれにしてもチバル王國に多大の感謝を捧げねばならぬ。チバルは印度の北方雪のヒマラヤの山脈に沿うた東西六百哩南北百五十哩ばかりの國である。風俗習慣印度に近く、言葉も梵語と相似てゐる。ライトのチバル史を讀むと附録にチバルの歌が澤山に擧げてあるが梵語に近いことは驚くべきものだ。さればこそ澤山の梵語聖典を無難に傳へて來たのである。併し經典の悉くは寫本であつて、紙本なると貝葉なると新しきと古きとで非常に等差はあるが、多くは筆工の誤寫少からず、これが出版には多大の苦心を以て校訂をせねばならぬ。併しどこにもかくにも從來到底發見の希望無しと思はれた支那譯經典の原文、其の傍の幾らかをでも、チバル梵策の上に見ることが出来るのは多幸であると言はねばならぬ。即ち一は印度平原を逐はれて雪山々麓に残存し、展轉の間、章句の上に多少の痛手を被つたチバルの梵策、一は王朝幾代の保護の下に生産せられ而も原典の母を喪ひし支那譯經典、この二つが多生の因縁未だ盡きずして、此に、處は日東の吾人が研究室の卓上に相會して互に握手をするのである。

予は此に本題に立ち戻つて宗祖製作の御本書中、引用經典の原典に對映し得るもの幾何なるかを考察して見よう。著作の年を元仁元年とすれば明年は七百年目である。七百年の長き間原典にめぐ

り會はざりし引用經典の或るものは母を得し喜びに躍るであらうか、將た又案外にも章句のあまりな變り方、符合せぬ節々の多きに呆れてあれは餘所の叔母さんだ眞の阿母さんらしくないといふことになるか、其邊の問題は問題として残すとしても、亦幾分の興味無きにしても非ずと思ふ。

中井玄道氏校訂教行信證に據るに、經典の引用は正引子引を合して總計三十二經に上る。其中短きは一行に満たざるものもあるが、長きは數十頁に至るものもあり、且つ數箇所引用されて居るから、若しこれら總てが原典に對校し得るとしたならばこの一小篇の到底企及すべき所ではないのだが、幸か不幸かこの三十二經の中で原典に對校し得られるのは僅かに八經のみである。これが百回程の間に學者の努力した結果なのである。その中でも華嚴經の或る部分の如きは原典發見されず對校する由もないといふ哀れな状態である。併しながらこの八經の中でも半數はまだ出版すらも十分に出來てゐないといふ有様だから、これをこれだけに對照するには多少の苦心も要するのであつてどもかく現今の學界としてはこれが精一杯であることを諒して貰ひたい。尙ほ以下御本書の頁數は中井氏校訂本に依る

第一、華嚴經

舊譯即ち六十經、具に大方廣佛華嚴經、六十卷、三十四品、東晉佛跋陀羅譯、梵本は Dasādhir-

miśraṇa ṅ Gandavyūha である。前者は十地品、後者は入法界品に相當する。この中卷五菩薩明難品第六〔天、二十八、左八行〕の文殊法常爾——力無畏亦然の文は行卷九七頁にあるが梵本無く對校不可能である。卷二十四、十地品第二十二之二〔天、八十五、左〕の離於占相——信罪福因縁の文は化卷末四六頁にあるがこの稿を起すまでに十地品の梵策を手にすることが出来なかつたから本文を擧げることが出来ないこれは不日補遺として發表しようと思つてゐる。次に卷六十八入法界品第三十四之十七〔天、九、百一、右九〕の聞此法歡喜——興諸如來等の文は信卷末四八頁に出てゐるが、これは梵本これに相當する文が見當らぬので對校出来ない。

新譯即ち八十經、具に大方廣佛華嚴經、八十卷三十九品、于闐國實叉難陀譯、この中卷十四賢首品第十二之一〔天、五十九、右十五〕信爲道元功德母——無疲厭の文は信本四九頁に出てゐるが、梵本無く對校に由なし。

(一)次に卷六十八入法界品第三十九之一〔天、九十一、右十三〕の文は化卷已本六三頁に次の如く出てゐる。

如來大慈悲 出現於世間 普爲諸衆生 轉無上法輪

如來無數劫 勤苦爲衆生 云何諸世間 能報大師恩

此の文序の謄寫本八一頁六行には次の如く見ゆ

Ar thīya sarva-sattvānām utpadyante taḥ iḅgataḥ, Mahā-karuṇā-dhīrā dharmā-caakra-pravartakāḥ,

『譬如有人、用獅子筋以爲琴絃、音聲既奏、餘絃斷絶。一切如來波羅蜜身、出菩提心功德音聲、若樂五欲二乘法者、聞悉斷滅。譬羖馬羊、乳合在一器、以師子乳、投彼器中、餘乳消盡、直過無礙。如來師子菩提心乳、著無量劫所積諸業煩惱乳中、皆悉消盡、不住聲聞緣覺法中……譬如有人、用翳身藥、以塗其目、自在遊行、無能見者。菩薩摩訶薩亦復如是、得菩提心滿足大願、自在遊行入魔境界、一切衆魔所不能見』

とある文の取意にして、此の文子の謄寫本一千三百二十二頁五行に出で、三段に分る。第一段師子絃の喩は次の如くである。

Tadyathā kulaputra simha-snāyu- rta-viñā-tantri-śabdena sarva-viñā-tāntryah saṃchidyante, evam eva pāramitā-śarira-tathāgata-bodhi-cittoipada-snāyu-tantri-guṇavarṇa-śabdena sarva-kāmo;guṇa-ratī-vinatantryah samchidyante, sarva-śrīra-ka-pratyekabuddha-caryā-guṇa-katnaś ca samirudyante.

『善家男子よ譬へば、師子の筋を以て作られたる琴の絃聲によりて一切の琴の絃は斷絶せらるゝ如くに、實にかくの如く、成滿身なる如來の菩提心發生の筋絃の種々なる聲によりて一切の欲樂の種々なる琴絃は斷絶せらる。一切の聲聞獨覺の行の種々なる論議も亦消滅するなり』

第二段、師子乳の喩は次の如くである。

Tadyathā kulaputra go-mahisy-ajā-Ksīra-mahā-samu-dra eka-simha-vindu-prakṣeṣeṇa sarva-ksīrāṇy

『正覺の行を修行する最上の有情を見る所の諸の有情は實に淨心を有するも、害心を有するも、すべて彼等はその攝受に歸するなり』

(四)次に卷七十七入法界品第三十九之十八(經四、六十一)の文、化卷本六二頁に出づ。

汝念善知識 生我如父母 養我如乳母 增長菩提分

如醫療衆疾 如天灑甘露 如日示正道 如月轉淨輪

此の文字の謄寫本一千二百六十四頁八行に出づ、

Mātr-bhūta janakāyi me mamā dhātṛ-bhūta guṇa-sampādyakāḥ,

Bodhi-āṅga-paripalakaḥ sadācchi miira ahita-nivirakāḥ,

Vaidya-bhūta jara-mṛtyu mocakāḥ Sakra-bhūta amṛ tabhivarsakāḥ,

Candra-bhūta śubha-pūrṇa-maṅḍalāḥ sūrya-bhūta siva-mūrga-darśakāḥ.

『これ我が生せしところ、雙親の如し。功德を具足すること保護者の如し。常に菩提分を護りそれを以て友は敵を防ぐ。老死を免れしむること醫の如し。甘露を雨ふらすこと帝釋の如し。淨輪満ちたること月の如し、幸福の道を示すこと太陽の如し。』

(五)次に子引の中に於て、行卷三六頁に安樂集を引いて『譬如有人用師子筋——一切惡魔諸障直過無難』と云へるは舊譯經卷五十九、入法界品第二十四之十六(經九、九十四)に

『譬如有人、用獅子筋以爲琴絃、音聲既奏、餘絃斷絶。一切如來波羅蜜身、出菩提心功德音聲、若樂五欲二乘法者、聞悉斷滅。譬羆馬羊、乳合在一器、以師子乳、投彼器中、餘乳消盡、直過無礙。如來師子菩提心乳、著無量劫所積諸業煩惱乳中、皆悉消盡、不住聲聞緣覺法中……………譬如有人、用鷲身藥、以塗其目、自在遊行、無能見者。菩薩摩訶薩亦復如是、得菩提心滿足大願、自在遊行入魔境界、一切衆魔所不能見』

とある文の取意にして、此の文子の謄寫本一千三百二十二頁五行に出で、三段に分る。第一段師子筋の喩は次の如くである。

Tadyathā kulaputra siṃhā-snāyu- rta-viñā-tantriśabdena sarva-viñā-tāntryaḥ saṃ chidyante, evam
eva pīramiti-śarīra-tathāgata-bodhi-citotpada-snāyu-tantri-guṇavarṇa-śabdena sarva-kāmo;gūna-rati-
vinatantryaḥ saṃchidyante, sarva-śīrāraka-pratyekabuddha-caryā-guṇa-khaś ca sammirudhyante.

『善家男子よ譬へば、師子の筋を以て作られたる琴の絃聲によりて一切の琴の絃は斷絶せらるゝ如くに、實にかくの如く、成満身なる如來の菩提心發生の筋絃の種々なる聲によりて一切の欲樂の種々なる琴絃は斷絶せらる。一切の聲聞獨覺の行の種々なる論議も亦消滅するなり』

第二段、師子乳の喩は次の如くである。

Tadyathā kulaputra go-mahisy-ajā-Kśīra-mahā-samu-dra eka-simha-vindu-prakṣeṣeṇa sarva-kṣīrāṇy

『正覺の行を修行する最上の有情を見る所の諸の有情は實に淨心を有するも、害心を有するも、すべて彼等はその攝受に歸するなり』

(四)次に卷七十七入法界品第三十九之十八(經二八十一)の文、化卷本六二頁に出づ。

汝念善知識 生我如父母 養我如乳母 增長菩提分

如醫療衆疾 如天灑甘露 如日示正道 如月轉淨輪

此の文予の謄寫本一千二百六十四頁八行に出づ、

Mātr-bhūta janakāryi me mamā dhātṛ-jhūta guṇa-sampādyakāh,

Bodhi-āṅga-paripālakah sadāebhi mīra ahīn-nivṛtakāh,

Vaidya-bhūta jara-mṛtyu mocakah Sakra-bhūta amṛ tabhivarsakah,

Candra-bhūta śubha-pūṛṇa-maṅḍalah sūrya-bhūta siva-mārga-darsakah.

『これ我が生せしところ、雙親の如し。功德を具足すること保護者の如し。常に菩提分を護りそれを以て友は敵を防ぐ。老死を免れしむること醫の如し。甘露を雨ふらすこと帝釋の如し。淨輪満ちたること月の如し、幸福の道を示すこと太陽の如し。』

(五)次に子引の中に於て、行卷三六頁に安樂集を引いて『譬如有人用師子筋——一切惡魔諸障直過無難』と云へるは舊譯經卷五十九、入法界品第三十四之十六(經二八十一)に

此の分は梵文なく對校不可能である。

尙ほ行卷一〇四頁の一乘嘆徳の下二十八喩の文體は明かに入法界品彌勒菩薩の下の菩提心の譬喩と無量壽經下卷の菩薩の嘆徳の下の譬喩とを合糅したるものにして、行卷七八頁の往生要集所引の波利質多樹華の喩、石汁の喩は華嚴入法界品に同意義のものを發見し得るも引用の明示なければ比較を略する。

第二 悲 華 經

北涼曇無讖譯、十卷、六品、梵本は *Karunāpūṇḍarīka* と云ふ。印度の出版本あり。今卷三、諸菩薩本授記品第四之一より二文を引用してある。共に無諍念王の願文である

(七) 一は行卷一〇頁、經(經下、十五)の文は次の如くである。

願我成阿耨多羅三藐三菩提已、無量無邊阿僧祇餘佛世界、諸有衆生、聞我名者、修諸善本、欲生我界、願其捨命之後、必定得生。唯除五逆、誹謗聖人、廢壞正法。

梵本は印度出版の分にて三十五頁十二行に出づ。

*Bodhi-prāptasya mamāprameyeṣv asaṃkhyeṣv anyeṣu buddha-kṣetreṣu ye sattvā nīmadheyam
sīnyuṣ te sarve buddha-kṣetra-kusāla-mūla-pariṇāmanam kṛtvā mama buddha-kṣetra upapadye-*

寶珠、入生死海、而不沈沒。

これは予の謄寫本一千三百〇九頁一行に出づ。

Tadyathā kulaputraudaka samvāsa-maṇi-ranivabad=dhe kaivarta udake na mryate, eva sarva jata cittodaka-samvāsa-maṇi-ratha gṛhito bodhisattvāḥ sarva-saṁsāra-sāgare na mryate. 『善家男子よ、譬へは住水寶珠を纏ひたる時に漁夫は水に於て死せざるが如く、此の如く、一切智性の心の住水寶珠を持てる菩薩は一切生死の海に於て死することなし。』

第三は同〔天九、九十五〕次下の文、

譬如金剛、於百千劫、處於水中、而不爛壞、亦無異變。菩提之心、亦復如是。於無量劫、處生死中、諸煩惱業、不能斷滅、亦無損滅。

此の文予の謄寫本では千三百四十頁九行に出づ。

Tadyathā kulaputra vajram udakena na khidyate, evam eva bodhicittotpāda-vajram sarva-karma-kiešo dakṣa sarva-karma-saṁvāsair na khidyate na khid-yate.

『善家男子よ、譬へば金剛は水によつて腐蝕せず。かくの如く菩提心發生の金剛は一切業煩惱の水によりて一切の業と同處にあることによりて腐蝕せず損滅することなし。』

次に眞佛土卷四〇頁、論註所引、經卷卅三卅六、寶王如來性起品第卅二之一〔天八六、三三右〕であるが

此の分は梵文なく對校不可能である。

尙ほ行卷一〇四頁の一乘嘆徳の下二十八喩の文體は明かに入法界品彌勒菩薩の下の菩提心の譬喩と無量壽經下卷の菩薩の嘆徳の下の譬喩とを合糅したるものにして、行卷七八頁の往生要集所引の波利質多樹華の喩、石汁の喩は華嚴入法界品に同意義のものを發見し得るも引用の明示なければ比較を略する。

第二 悲 華 經

北涼曇無讖譯、十卷、六品、梵本は *Karunāpūṇḍarīka* と云ふ。印度の出版本あり。今卷三、諸菩薩本授記品第四之一より二文を引用してある。共に無諍念王の願文である

(七) 一は行卷一〇頁、經〔經一、十五〕の文は次の如くである。

願我成阿耨多羅三藐三菩提已、無量無邊阿僧祇餘佛世界、諸有衆生、聞我名者、修諸善本、欲生我界、願其捨命之後、必定得生。唯除五逆、誹謗聖人、廢壞正法。

梵本は印度出版の分にて三十五頁十二行に出づ。

*Bodhi-prāptasya manāpameyeṣv asaṃkhyeṣv anyeṣu buddha-kṣetreṣu ye sattvā nīmadheyam
sṃnyus te sarve buddha-kṣetra-kusāla-mūla-pariṇāmanam kītvā mama buddha-kṣetra upapādye-*

寶珠、入生死海、而不沈沒。

これは予の謄寫本一千三百〇九頁一行に出づ。

Tadyathā kulaputraudaka samvāsa-maṇi-rām ivabad=dhe kaivarta udake na miyate, eva sarva jñata cittodaka-samvāsa-maṇi-rāna gṛhito bodhisattvaḥ sarva-samsāra-sāgare na miyate.

『善家男子よ、譬へは住水寶珠を纏ひたる時に漁夫は水に於て死せざるが如く、此の如く、一切智性の心の住水寶珠を持てる菩薩は一切生死の海に於て死することなし。』

第三は同(天九、九五)次下の文、

譬如金剛、於百千劫、處於水中、而不爛壞、亦無異變。菩提之心、亦復如是。於無量劫、處生死中、諸煩惱業、不能斷滅、亦無損滅。

此の文予の謄寫本では千三百四十頁九行に出づ。

Tadyathā kulaputra vajraṇ udakena na khidyate, evam eva bodhicittotpāda-vajraṇ sarva-karma-kleśo dakena sarva-karma-samvāsair na khidyate na khidyate.

『善家男子よ、譬へば金剛は水によつて腐蝕せず。かくの如く菩提心發生の金剛は一切業煩惱の水によりて一切の業と同處にあることによりて腐蝕せず損滅することなし。』

次に眞佛土卷四〇頁、論註所引、經卷卅三―卅六、寶王如來性起品第卅二之一(天八、卅三)であるが

し。而して彼等はわれを見て歡喜と淨心をわが前に生ずべし。而して一切障礙を除くべし。而して死してわが佛國に生ずべし。』

次に子引の部分に二文あり。

(九)行卷六〇頁、述文贊の所引、兩時寶藏如來——爲無量清淨とあるは其の一。これは取意の文で經卷三、諸菩薩本授記品第四之一〔續三、六〇〕には次の如く出づ。

爾時寶藏如來、語轉輪王言、善哉善哉、大王、今者所願甚深。已取淨土、是中衆生、其心亦淨。

大王汝見西方、過百千萬億佛土有世界、名尊善無垢。彼界有佛、名尊王如來應供正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊。今現在爲諸菩薩說於正法。彼界無有聲聞辟支佛名、亦無有說小乘法者。純一大乘清淨無雜。其中衆生、等一化生、亦無女人及其名字。彼佛世界所有功德清淨莊嚴、悉如大王所願、無量種々莊嚴佛之世界等無差別。悉已攝取無量無邊、調伏衆生。今改汝字爲無量清淨。

梵本三十六頁一行に出づる文は次の如くである。

Atha khalu kulaputra Ratnagarbhas tathāgato 'han samyak-sambuddho rajño 'raneminahsādhu-karam adāt, Sādhu sādhu mahā-rāja gambhīras te mahā-kāja pānidhānam pariśuddham te buddha kṣetram parigrhītam; pasya mahā-rāja pāścimāyām disī koṭi-sata-saha-sra-budha-

kṣetrānām atikramya Indra-suvirājita nama lokadhātuh. Tatrendra-ghoṣa-śvara-rājo nama
rathāgato han samyak-sambuddhas tīṣṭhāti dhriyate yāpayati parisuddhānam satvānām dharmam
deśayati. Na ca tatra buddha-kṣetre śrāvaka-pratyekabuddhānām prajnapitṛ apyasti. Utpadya
na tatra śrāvaka-pratyekabuddha-kathā kriyate. Suddhā ca tatra mahā-yāna-kathā, sarvatra
voṣṭhāpadukāḥ sattvā, na ca tatra mātṛ-grāmasya nāmapi jñāyate. sarvatra te guṇās tatra buddha-
kṣetre yathā mahā-rājenāparimitam buddha-kṣetra-guṇa-vyūha-pranidhānam kṛtam. Amīśayāḥ
sattvā vaineyāḥ parigrhītas.

『時に、善家男子よ、寶藏如來應供正等覺者は、無諍王に善哉を與へたり。大王よ、善きかな、善きかな、大王よ、汝の願は甚深なり、攝取せる汝の佛國は清淨なり。大王よ、見よ、西方に於て百千俱胝の佛國を過ぎて帝善顯と名けられたる世界あり。かしこに帝音自在王と名くる如來應供正等覺者は住し、持ち、時を過し、清淨なる諸有情のために法を説けり。又かの佛國に聲聞獨覺の施設すらあることなし。生じてはかしこに聲聞獨覺の説話はなされざるなり。かしこには清淨なる大乘の説話あり。有情は一切の處に於て化生なり。かしこに女人の名だにも知られず。一切の處かの佛國に於てかれらの功德は大王の建てたる無量の佛國功德莊嚴の願の如し。諸有情は無量の意樂を有し調伏せらるべく、攝取せらるべし。』

(二〇)次に信卷末八八頁、散善義所引、『經云猶如比丘入三禪之樂也』の文。經とは悲華經、卷二、大施品第三之一〔雜八〕に出づ。

時轉輪王、頂戴一燈肩荷二燈、左右手中執持四燈、其二膝上、各置一燈、兩足踏上、亦各一燈、如是竟夜供養如來。佛神力故、身心快樂、無有疲極。譬如比丘入第三禪、轉輪聖王所受快樂、亦復如是。

梵本では十九頁、四行より始まる。

Bhikṣu-saṅghasya ca rātrau svayam eva rājāranemi bhagavataḥ purataḥ śhītvā ekām dipa-
sthalīm śirasy upasthāpayitvā dvāv aṁṣayor dvā-pāṇyor dvā-carāṇayor dipa-sthalīḥ sarva-
ratir bhāgava=tah purato dipam jvalayam^{no} bhagavato 'nubhāvenā=klānta kaya evam-rupam
kāya-sukham pratīsamveda-yati sma. Tadyathāpi nāma tṛtīya-dhyāna-samāpan=nasya bhikṣor
evam aklānta kayo 'klānta-citto māsa-trayam bhagavan^{am} upasthitavān.

『而して比丘の衆中にして、夜に於て無諍王は自から世尊の前に立ち、一の燈皿を頭上に置き、兩肩、兩手、兩足に於て、燈皿を(置きて)、終夜世尊の前に燈明を輝かしつゝ世尊の威力によりて身疲勞せず、かくの如き身樂を感じたり。譬へば第三禪に入れる比丘の如くかくの如く身疲勞せず心疲勞せず三月の間世尊を供養したり』』

第三 文 殊 般若

具さには文殊師利所説般若波羅蜜經、二卷、梁曼陀羅仙譯。引文は行卷四〇頁にあり。善導の禮讚〔四七〕の所引。『又如文殊般若云欲明一行三昧—及一切佛等』。

(一一)經〔三七、五〕の文は次の如くである。引文は取意。

善男子善女人、欲入一行三昧、應處空閑、捨諸亂意、不取相貌、繫心一佛、專稱名字、隨佛方所、端身正向、能於一佛、念念相續。卽是念中、能見過去未來現在諸佛。

梵本は予の謄寫本七三頁一行に出づ。七百頌般若 Sapta-Satika-prajñāpāramitā と稱するものにて、般若として念佛三昧の出るのは珍しい。

Eka-vyūhan samādhan ava tar tukāmena Manju-rih kulaputreṇa vā kuladuhitāvā vibhaktini śayanā-sanāni kar tavyāni; asamсарgārāmeṇa ca bhaviṭavyam, sarva-nimi tāmānasikāreṇa par-yankam baddhvā niṣi-ditavyam; tatraikas tahtāgato manasikartavyah; sarva-dharmās ca man-asikartavyā anupalambha-yoge-nāyam ca tathāgatam manasi kuryāt, tasya nāmadheyam gṛhitavyam; tacca nāmadheyam sruṭvopa'bhya yas-yām diṣi sa tathāgatas tāḍisyām amukhī-krīya niṣi ditavyam; tam evam tathagatam manasikurvātā tena manasikṛ tenāti tānāgata-pratyū panna

『文殊師利よ、一行三昧に入らんと欲する若くは善家男子若くは善家女子によりて隔離せられたる牀座は設けらるべきなり。而して快樂は遠離せられてあるべきなり。一切諸相を意念せずして結跏して坐すべきなり。其處に一の如來が意念せらるべし。而して無繫念相應を以て諸法は意念せらるべく、彼はこの如來を意念すべきなり。其の名號は執持せらるべきなり。而してその名號を聞き、持ちて、彼の如來がある方面に面して坐すべし。かくの如く彼の如來を意念する彼は過去未來現在の諸佛世尊を意念してあるべきなり。』

第四 佛本行集經

(一一)此の經は六十卷、六十品、隋闍那崛多譯。梵本は大體に於てセナル (E. Senart) 出版の Mahāvastu に同じ。化卷末四九頁に卷四十二優波斯那品第四十五上〔辰九_七頁〕の文を引く。文本經と少異あり。

爾時彼三迦葉兄弟、有一外甥螺髻梵志、其梵志名優波斯那、乃至恒共二百五十螺髻梵志弟子、修學仙道。彼問其舅迦葉三人、諸弟子、往詣於彼大沙門邊。阿舅剃除鬚髮、著袈裟衣。見已向舅而說偈言。

舅等虛祀火百年 亦復空修彼苦行 今日同捨於此法 猶如蛇脫於故皮
爾時彼舅迦葉三人、同共以偈報其外甥優婆斯那作如是言。

我等昔空祀火神 亦復徒修於苦行 我等今日捨此法 實如蛇脫於故皮
梵本第三卷四三一頁に相當の文あり。この文は純梵語でない。俗語を混用す。

Tesān dāni Upaseno nāma bhāgīneyo tasyaiva nadyās Nairāṇ janāyās tīre āśramam Payitva
patropetam puspopetam phalopetam tatrāsau prativasati tri-śata-parivāro catur-dhīyanalābhi
pañcābhi jño maharddhiko mahānubhāvo.....

Atha khalu Upaseno īsir yena Uruvilvākāśyapo teno=pasamkramitvā āyusmantam Uruvilvākāśy-
apam gāthāye adhyabhāse:

Mohan te juhi to agni mohan te so tapo kṛt to, Yam jāhe paścime kale jīrṇānvā urago tvacam.

Atha khalv āyusmān Uruvilvākāśyapo Upasenam īsim gāthāye pratyabhāse.

Mohan me juhi to agni moham me so tapo kṛtoYam jāhe paścime kale jīrṇām va urago
tvacam.

『其の時優波新那と云へる彼等の甥はかの尼連禪河の岸の上に葉茂り華咲き果實結ぶ住處を構へて、かしこに住したり。三百(の弟子)に圍まれ、四禪定を得、五通あり、大神通あり、大威力あり』

り……………

時に優波斯那聖者は優婁頻螺迦葉の方に往き尊者優婁頻螺迦葉に偈を説けり。徒らに汝は火を祀り、徒らに汝は彼の苦行をなせりそを最後の時に捨てぬ蛇の古き皮を(捨つる)如く。時に尊者優婁頻螺迦葉は優波斯那聖者に偈を以て答へたり。

徒らに吾は火を祀り、徒らに吾は彼の苦行をなせり、そを最後の時に捨てぬ、蛇の古き皮を(捨つる)如く

第五 大品 般若

(一二)具には摩訶般若波羅蜜經、姚秦、鳩摩羅什譯、二十七卷、縮藏月帙三、四、梵本は二萬五千(頌)般若 Pancainśatisāhasikā Prajñāpāramitā と稱す。信卷八〇頁に論註所引の文あり。經卷十一、信毀品第四十一(月三十一、十一)。

是人種愚癡因緣業種。是愚癡因緣罪故、聞說深般若波羅蜜皆毀。皆毀般若波羅蜜故、則爲皆毀過去未來現在諸佛一切智一切種智。是人毀皆三世諸佛一切智故、起破法業。破法業因緣集故、無量百千萬億歲、墮大地獄中。是破法人輩、從一大地獄、至一大地獄。若火劫起時、至他方大地獄中、生在彼間。從一大地獄、至一大地獄。彼間若火劫起時、復至他方大地獄中、生在彼間、從一大地

原典より見たる御本書中の引用經典

獄、至一大地獄、如是遍十方。彼聞若火劫起故、從彼死。破法業因緣未盡故、還來此間大地獄中、生此間、亦從一大地獄至一大地獄、受無量苦。

梵本は大谷大學所藏の謄寫本、第二百五十葉表九行より、第二百五十葉裏七行に至る文に相當す
る。

Te tena dauṣprañā-samvar tanīyena karmaṇā kṛteno=paci tena imām gambhīrām prañā-pārami tām bhāsya=māṇām pratyākhyāyanti, taḥ pratyākhyāir atīṣṇāgata-pratyutpannīnām buddhānām bhagavatām sarva-jñātām pratyākhyāyanti bhavanti, te tena sarva-jñā=tā-pratyākhyāyena (dharma-vyasanam samvartante, te tena) dharmā-vyāsana-samvar tanīyena karmaṇā kṛteno=paci tena bahūni varṣāni bahūni varṣa-sahasraṇi b (=huni vṛṣa-koti-niyuta-śā-ta-sahasraṇi mahā-nira=yam prakṣepsyante, teṣām mahā-nirayān mahā-nira=yam samkrāma tām te jaḥ-samvartanti vā īp-samvar tani vā vāyu-samvartanti vā prādur-bhaviṣyati, te tīṣṇu samvartantiṣu prādur-bhūtāṣu anyesu loka-dhā=tuṣu yeṣu mahā-nirayāṣu teṣu prakṣepsyante, te teṣū=papannaḥ sammānāḥ mahā-nirayān mahā-nirayam samkrā=niṣyanti, teṣām mahā-nirayān mahā-nirayam samkrā=matām punar eva samvar tanyāḥ prādur-bhaviṣyanti, taṣu samvar tanīṣu prādur-bhūtāṣu pūrvas yām dīṣi prakṣepsyante dakṣiṇasyām paścimāyām uttarasyām vidikṣu ūrdhvam adho dīṣi yeṣu

mahā-nirayās tesu prakṣepsyante, tebhyo' pi punar saṃvartaniṣu prā=duṛ-bhūtāsu anyeṣu loka-dhātuṣu yeṣu mahā-nirayās tesu prakṣepsyante, te punar api tebhyo loka-dha=ṭubhyah saṃvartaniṣu prāduṛ-bhūtāsu tebhyo mahā-nirayebhyas cyutās tena dharmā-vyasana-saṃvartani=yena karmaṇā akṣiṇena punar eva ihopapatsyante, tena punar eva mahā-nirayān mahā-nirayaṃ saṃkrami=śyanti, te tesu mahā-nirayeṣūpapannā bahūni tivrā=ni mahā-ka ṭukāni mahā-niraye duḥkhāni pratyannubha-viśyanti, tāvad eva te tāni niraya-duḥkhāni praty=annubhaviśyanti yāvat punar eva saṃvartanyah prā=duṛ-bhaviśyanti saṃvartaniṣu prāduṛ-bhūtāsu itaś cyutā anyeṣu loka-dhātuṣu punar eva mahā-nirayeṣū=papatsyante.

『彼等はこの愚癡より起りたる造られ集められたる業によりて、この深き般若波羅蜜多の説かるゝを皆毀す。この皆毀によりて過去未來現在の諸佛世尊の一切智を皆毀しつゝあり。彼等はその一切智性を皆毀するより法を棄つるなり。彼等はこの法を棄つるより起る造られ集められたる業によりて、多年の間、幾千年の間、多俱胝尼由他百千年の間、大泥犁に墮す。彼等の大泥犁より大泥犁を經廻しつゝある間に、若くは火若くは水、若くは風の劫災は出現すべし。彼等はその劫災の出現するや、他の世界に於て、大泥犁に墮すべし。彼等はそこに墮したる間に大泥犁より大泥犁を經廻せん。彼等の大泥犁より大泥犁を經廻しつゝある間に又劫災は出現すべし。その劫

災の出現に於て、東方に於て墮し、南方、西方、北方、四維、上下の方に於て大泥犂に墮すべし又彼等にまで劫災の出現する時に、他の世界に於て大泥犂に墮すべし。又彼等はかの世界にまで劫災の出現する時に、かの大泥犂より死してかの法を棄つることより起る業を以て滅することなく、又もや此に墮すべし。かくて又大泥犂より大泥犂を經廻すべし。彼等はかの大泥犂に生じて鋭く大に苦しき大泥犂の中に、多くの苦を受くべし。又もや劫災が出現し、劫災出現に於て、此に死して他の世界に於て復び大泥犂に墮するその限りは彼等はその泥犂の苦を受くべきなり。』(一四)次に眞佛土卷五三頁に玄義分所引の經文がある。如大品經涅槃非化品中說云——不生不滅者不如化耶とあるが、經卷二十六、如化品第八十七〔初、キ十六〕には次の如く出づ。

須菩提、於汝意云何、若有化人作化人、是化頗有實事不空者不。須菩提言。不也、世尊、是化人無有實事而不空。是空及化人、二事不合不散、以空故。空不應分別是空是化。何以故、須菩提、色即是化、受想行識即是化、乃至一切種智即是化。須菩提白佛言。世尊、若世間法是化、出世間法亦復是化不。所謂四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分、三解脱門、佛十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、並諸法果、及賢聖人、所謂須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、菩薩摩訶薩、諸佛世尊、是法亦是化不。佛告須菩提。一切法皆是化。於是法中、有聲聞法變化、有辟支佛法變化、有菩薩摩訶薩法變化、有諸佛法變化、有煩惱法變化、有業因緣

法變化。以是因緣故、須菩提、一切法皆是變化。須菩提白佛言。世尊、是諸煩惱斷、所謂須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、辟支佛道、斷諸煩惱習、皆是變化不。佛告須菩提。若有法生滅相者、皆是變化。須菩提言。世尊、何等法非變化。佛言。若法無生無滅、是非變化。須菩提言。何等是不生不滅非變化。佛言。無誑相涅槃、是法非變化。世尊、如佛自說諸法平等、非聲聞作、非辟支佛作、非菩薩摩訶薩作、非諸佛作、有佛無佛、諸法性常空、性空卽是涅槃、云何言涅槃一法非如化。佛告須菩提。如是如是、諸法平等、非聲聞所作、乃至性空卽是涅槃、云何言涅槃、聞是一切法、畢竟性空、乃至涅槃亦皆如化、心則驚怖。爲是新發意菩薩故、分別生滅者如化、不生滅者不如化。須菩提白佛言。世尊、云何教新發意菩薩令知是性空。佛告須菩提。諸法本有今無耶。

梵本は大谷大學所藏の謄寫本第五百二十五葉表八行より第五百五十六葉表二行に至る文に相當す

20。

Api tu khalu Subhute yan nirmito 'nya-nirmita mñirminoti kascit tasya tad vastv asti yan na śūnyatā? Subhūtir āha: No hi bhagavan nirmita tasya hi bhagavan na kascid vastv asti yan na śūnyatā tā. Yāvāt śūnyatā yaś ca nirmitaḥ, Ubhāv etaḥ dharmāu na sam=vyuktau na visa=ṃyuktau dvāv evai tau śūnyatayā sū=nyau. Tārhi tīr kiṃ cin miśri tamiyam śūnyatā, ayaṃ nirmit-

taḥ. Tat kasya hetoh. Tathā hi tāv ubhāv api śūnyatayām nopalabhyete, iyam śūnyatā, ayam nirmiti-
 taḥ Bhagavān āha: Nāsti Subhūte rūpasya vedanāyāḥ saṃjñāyāḥ samskāṛāyā vijñānasya yaś ca
 nirmiti to yā=vac chñnyatā ubhayaṃ etac chñnyatā. Subhūtir aha. Yad bhagavan nirmitā laukika-
 dharmā nirmiti tāpi tu ime loko tara-dharmā nirmiti tāḥ; yaduta: catvāri smi=ty=upasthānāni
 catvāri samyak-prahāraṇāni catvāra ṛddhi-pādāḥ pañcendriyāṇi pañca balāni sapta-bodhy-abhūgā
 ni āryaśikṣāṅgo mārgās catvāry ārya-sāyāni śūn-yatānini ttāprāṇiṇi tāny adhyātma-śūnyatā vahir-
 dhasūnya tā adhyātma-vahirdha-sūnya tā yāvad abhāva-sva-bhāva-śūnya ta pañcābhi jñā aṣṭā-
 vimokṣa navanupurva-vihāra-samāpattayo 'praṇānā-dhy ananupūrva-samāpat-tayḥ sarva-
 samādhyāyāḥ sarva-dhāraṇi-mukhāni dāśa pārāmi tā dāśa bodhisattva-bhūmayo dāśa tathāgata-
 balāni catvāri vaiśāradyāni catvāraḥ pratisaṃvi do śtāḍasa venikā-budaha-dharmā mahā-
 krūṇā ca ye te-śām phalāni yena te pudgalāḥ prajñāpayante sraḍhā=nuśāri dharmāṅnuśāri
 aślamakāḥ srotāṅpannah sakṛd-āgāmy ānāgāmy arhat pratyekabudaho bodhisattvo ma-
 hāsattvaḥ tathāgato' rhan samyak-saṃbuddho 'pi nu bhagavanṃ ime dharmā nirmiti tāḥ ?
 Bhagavān āha; yatra pumaḥ sarva-dharmānirmiti tis tatra kaścic ch-rāvako nirmiti taḥ kaścit
 pratyekabuddho nirmiti taḥ (Kascid bodhisattvo mahāsattvo nirmitaḥ) kas-cit tathāgato nirmitaḥ.

kascit kleśo nirmi taḥ kas-cit karma nirmi taḥ anena Subhūte paryāyeṇa sarva-dharmā nirmi-
 tako, amā anāṇā-karaṇāḥ. Sbhūtir āha: Sa yat punar idam bhagavan prahāraṇam srotāpatti-
 phal-ṇ vā sakṛdāgami-phalaṇ vāḥattvaṇ vā pratyeka-buddha-bhūmir vā nirmi tā sarva-
 bodhisattvaṇuṣaṇḍhi-prahāraṇaṇ api nirmi tam ? Bhagavān āha: Ye kecit Su bhūte dharmā utpādi-
 vā nirodhi tā vasarva ete ni-rmi taḥ. Subhūtir āha: Katamo bhagavan dharmo yo na nirmi takalḥ ?
 Bhagavān āha: Yasya notpādotpādo na nirodhalḥ sa dharmo na nirmi taḥ. Subhūtir āha: Sa
 punaḥ katamo bhagavan sa dharmo yasya notpādotpādo na nirodhalḥ. Bhagavān āha: Asaṇḍhiṣa-
 dharmo na ni-rmi taḥ. Subhūtir āha: Yat punar bhagavan bhagavato-ktāṇ śūnyatāyā na syena-
 na ca parena na ca dvayeno-palabhyate, na ca kaścid dharmo yo na śūnyas tasmā-d bhagevan
 sammiṣa-dharmo nirmi tako bhavet. Bhaga vān āha: Evan etat Subhūte evam etat. Sarva-dharmāḥ
 Subhūte sva-bhavena sūnyās te na srāvakalḥ kṛtā na pratyekabuddhalḥ kṛ ta na bodhisattvaḥ
 mahāsattvalḥ kṛ tā na taḥāgatalḥ kṛtā yāvat sva-bhāva-sūnyatā tan nirvānam. Evam ukta-
 āyusmān Subhūtir bhagavan-tam etad avocāt: Adik-irnikā bhagavan puḍgalāḥ ka-tham avava-
 dītavayāḥ katham anuśāsītavayā yat svabha-va-sūnyatām pari jāniyātum ? Atha khalu bhagavān
 ayu-smantam Subhūtim etad avocāt: Kim punaḥ Subhūte purvam abhāvo bhaviṣyat I a c ād.

abhiivo bhavisyati ? Nātra Subhūte bhāvo nabhavo na sva dhavo na phara-dhāvah. Kuta eva sva-dava-sūnyatā bhavisyati?

『又須菩提よ、化(人)が他の化(人)を化作するとき、彼に就きて空にあらざる何等かの實體ありや。須菩提は云へり。否、世尊、化(人)に就きて空にあらざる何等の實體あることなし。化(人)なるものが空なる限り、この二法は結合せず。分離せず。實にこの二つは空なるを以て空なり。今これは空なりこれは化(人)なりと云ふことは幾分混淆せられたり。其の故は云何。かくの如く實にこの二法も亦空の中に於てこれは空なりこれは化(人)なりと了得せらるべきにあらざればなり。世尊は云へり。須菩提よ、色につきて、受につきて、想につきて、行につきて、識につきて化(人)と空とのこの二者が空なる限りは(何等のものも)あることなし。須菩提云へり。世尊よ、若し化作せられたる世間法が化ならばこれら出世間法も亦化なりや。即ち四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道、四聖諦、空、無相、無願、內空、外空、内外空、乃至、無法有法空、五通、八解脱、九次第住定、無量靜慮次第定、一切三昧地、一切總持門、十波羅蜜多菩薩十地、如來十力、四無畏、四無礙辯、十八不共法、及びその果なる大悲、それによりて導かる、彼等の人々隨信隨法、八(法)、預流、一來、不還、阿羅漢、獨覺、菩薩摩訶薩、如來應供、正等覺者、世尊よ、これらの法も亦化なりや。世尊云へり。一切諸法が化なる所には如何なる聲

聞法も化なり、如何なる獨覺も化なり、如何なる菩薩摩訶薩も化なり、如何なる如來も化なり、如何なる煩惱も化なり、如何なる業も化なり。須菩提よ、この因縁を以て一切諸法は化の如くにして不異の因を有す。須菩提云へり。世尊よ、若し預流、一來、不還、阿羅漢、獨覺地なるこの斷(道)が化ならば一切菩薩地に至る斷(道)も亦化なるや。世尊は云へり。須菩提よ、若くは生じ若くは滅する如何なる法もすべて是れ化なり。須菩提は云へり。世尊よ如何なる法か化にあらざる。世尊は云へり。生もなく滅もなきかの法は化にあらざる。須菩提は云へり。世尊よ生もなく滅もなきは如何なる法なりや。世尊は云へり。無誑の法は化にあらざる。須菩提云へり。世尊よ、若しも世尊の所説の如くんば空につきて、自によりても他によりても二者によりても了得せらるべきなし。何等の法として空にあらざるものぞ。故に世尊よ、無誑の法も化なるべし。世尊は云へり。須菩提よ、實に然り、實に然り。須菩提よ、一切諸法は自性に於て空なり。彼等は聲聞によりて作られず、獨覺によりて作られず、菩薩摩訶薩によりて作られず、如來によりて作られず、乃至自性空なるそは涅槃なり。此の如く云はれし時、尊者須菩提は世尊に白して云へり。世尊よ初發心の人をして自性空を了知せしめんには如何に教へ、如何に誨ふべきか。時に、世尊は尊者須菩提に告げて云へり。須菩提よ、曾て非存在がありしや。後に非存在があるべきや。須菩提よ、其處には存在もなく非存在もなく自の存在もなく、他の存在もなし。果して何處に自性空なるも

のいあるべからず。』

(註) 無註の原語 *asammita* は諸根 *eye* より來れるものと見ゆ。俗語の形なり。純梵語は *asammita* とあるべきか。辭典の上に見當らず。羅什の譯語を其儘にしあ置く。

第六 法 華 經

具には妙法蓮華經七卷二十八品、姚秦鳩摩羅什譯、梵本は *Saddharmapundarika* と稱し *Bibliotheca Buddhica* の中に出版せらる。今信卷末二三頁に龍舒淨土文所引の文『法華經謂彌勒菩薩報地也』と見えたるは經卷五如來壽量品第十六(左三十三、三十八)の文にして『彌勒菩薩等——無量無邊』とあり。梵本三百十六頁十二行より三百十七頁四行に至る文に相當し、予の譯本、新譯法華經三百五十四頁五行より十一行に至る文に相當する。

今一文は證卷四六頁の論註に引くところ、『如法華經普門示現之類也』とある。これは經卷七、觀世音菩薩普門品第二十五(每三、五)の文で『無盡意菩薩白佛言——度脫衆生』に至る。梵本四百四十四頁六行より四百四十五頁七行に至る文で、予の譯本四百九十一頁十四行より四百九十三頁六行に至る。これは得易き書物でありこの論文の頁數も大分増加したから引用を略する。

第七 阿 彌 陀 經

これは八箇處の引用あり。襄陽石刻を加ふれば九箇處になる。梵本は *Anecdota Oxoniensia* に出づる。 *Sukhāvāṭīrjīṭha* と稱せらる。今この對校は略することにする。次の無量壽經と共に別の機會に對校して詳細に論述したいと思ふ。

第八 無量壽經

其の引用は異譯を合して八十一回の多きに上る。これも前第七の理由で今對校を略し、別の機會に論述したいと思ふ。梵本 *Sukhāvāṭīrjīṭha* 前の第七と同名である。 *Anecdota Oxoniensia* の中に出版せらる。

さて、以上御本書の引用經典につき能ふ限りの範圍でこれを原典の上に求めて見たのであるが、材料の提供だけで日が暮れたわけで、存外頁數も増加したから、もう此の邊で一先づ終らねばならぬ。實はもつと梵漢對照して論述せねばならぬのであるが、これは無量壽經、阿彌陀經の引用の部分に就きて他日論ずる機會もあらうから其の時に譲る。

何にせよ、一千幾百年の間、全く引き離されて相逢ふことの出来なかつた原典と翻譯とが吾人の卓上に相會したのである。引用に異譯を添加する程に周到なる注意を拂はれる宗祖にして原典の存

在を知られたならば必ずや喜ばれることであらうと信ずる。尤も宗祖の引用は所謂慧心流の體裁に倣ひ、一種奇警卓拔とも云ふべき方法で、或は漢文の訓點讀法を改め、文の前後を省略するが如き頗る學者流の目より見れば亂暴に類するものがある。吾人は宗祖に學究を以て強ゐることは爲すべきでないが、一往は忠實なる學究的態度で研究せねば宗祖の意の所在は闡明するに由もなからう。原典研究の缺くべからざる所以は此に存する。又一方に原典の上に宗祖の如き態度を取らば如何であらう。随分面白い興味ある問題が生ずるであらうと思はれる。

それは兎も角として、吾人は原典を現行の支那譯に對照する場合、先づ(一)全然一致する場合と(二)多少一致を缺く場合と(三)全然反對の意義を有する場合とを考へる。(二)に就ては(a)原典よりも翻譯が増加せる場合と(b)原典が翻譯に於て省略せられたる場合と(c)原典が不完全にして翻譯作製當時の形體を失ひしたため闕如せる部分を有する場合とを考へ得る。これらの體例に依りて對照をなし敎義の上に、歴史の上に多少の貢獻をなすべきは吾人學徒の本分であり、徐ろにこの方面に研究の歩を進めんことを期して居る次第である。

終に臨んで茲に予は十年苦心の校訂に成りし中井玄道氏の敎行信證二卷に滿腔の敬意と感謝を表す。